

セルフメディケーションとまちづくり(その2):
官民学連携による子ども・子育て支援の
アウトリーチ活動に関する調査研究

昭和薬科大学薬学部

よしなが まり
吉永 真理

セルフメディケーションとまちづくり (その2) :
官民学連携による子ども・子育て支援のアウトリーチ活動に関する調査研究

昭和薬科大学薬学部 吉永 真理

(〒194-8543 町田市東玉川学園 3-3165 TEL 042-721-1546)

要旨

セルフメディケーション とまちづくりをテーマに官民学連携でアクションリサーチに取り組み、実践の効果検証を昨年度に引き続き行った。本年度のテーマは薬剤師のアウトリーチ活動であり、学校薬剤師の健康教育への取り組み、地域での育児や健康相談カフェへの薬剤師の参画、薬科大学生の地域との交流、をサブテーマとして取り組んだ。学校薬剤師に関しては、薬物乱用防止教育プログラムに健康教育の視点を取り込むことについて実践とインタビュー調査を行い、実践ではプログラム前後の児童の意識や理解度を調べ、インタビューでは薬剤師の現状認識を把握した。実践プログラム前後で児童の援助要請力に向上が見られ、さらに薬物乱用防止についての理解も見られた。インタビューでは「生徒への指導の方法」「生徒が教育を受ける意義」「学校薬剤師の指導の可能性」「学校側の実施の可能性」「学校側の担当者」の5つの概念が抽出され、今後解決すべき課題が示された。地域での子ども・子育て支援の薬剤師のアウトリーチについては、今年度は在宅で子育てする母親にとって食に関わる不安や悩みがあり、身近な相談者として離乳食製品の主たる購買先でもある薬局・ドラッグストアの薬剤師への期待とニーズが高いことが示された。薬学生と地域との交流では赤ちゃん親子の授業参加を行い、赤ちゃんを介して、大学生と母親の相互理解が深まることが示された。

1、調査研究目的

急速に少子高齢化が進む日本では、医療費の削減や健康寿命の意義を広めるために、コミュニティエンパワメントを通じた地域住民の健康意識の向上や健康的な生活習慣や行動を推進することの重要性が増している。セルフメディケーションというキーワードは個人のレベルで疾病管理やセルフケアを行うことと結びつくことが多いが、コミュニティレベルでは、学校や園で子どもの頃から行う教育プログラムや子育て支援活動とリンクして行うことでより大きな成果に結実することができる。申請者らは2017年度の官民学連携プロジェクトで実施した質問紙調査(103名の子育て中の親が回答)から、子どもの年齢が低いほど薬についての不安があり、①医師・

薬剤師への相談経験が多いこと、②気軽に相談できる場への需要が高い実態を把握した。さらに、地域住民、大学教員と学生、市役所職員、薬剤師、保育士が参加したワークショップでは、「専門家が身近になってほしい」「ニュースで知った健康の話題を話し合える場が欲しい」「子どもの健康や薬のことで気軽に情報交換したい」などの意見を得た(木戸・吉永、2018; 吉永、2018)。

本研究の基盤となるプロジェクトの調査対象地域は首都圏郊外のM市で、今後も子ども・子育て世代の流入が見込まれる場所である。子ども・子育て支援活動や身近な支援拠点設置へのニーズは高く、また多世代交流やまちづくり活動と連動することでセルフメデイケーション推進により高い効果が見込まれる地域である。著者らは、2018年度にはM市南部の駅周辺再開発地域で2年目となる官民学連携プロジェクトに取り組み、子ども・子育て世代への支援活動をテーマにアクションリサーチをした。2年目の主たる着眼点は薬剤師のアウトリーチ活動である。その際に、次のような3つのサブテーマを掲げた。

第一には、薬剤師による地域における子ども・子育て支援である。昨年度の調査結果からもニーズが高いことが明らかになっており、今年度も継続して実践と効果検証を行った。その際に、大学と地域の薬剤師会と行政が連携する活動の展開を行った。第二には、学校薬剤師の担う薬物乱用防止教育プログラムに健康教育の要素を入れた実践と効果検証を行うこと、ならびに学校薬剤師の健康教育についての意識をインタビューを通して、把握することである。実践と効果検証では、小学校授業で実験やロールプレイを取り入れたプログラムを実施し、事前事後で効果検証を行った。第三には、薬学生のまちづくりへの参画とその意義(吉永・飯塚、2018)の継続的な検討である。薬学生の参画した活動には、薬剤師のアウトリーチ活動も取り入れ、まちで活躍する薬剤師について学ぶ機会を設けた。さらに、行政や民間事業者および住民との交流機会を設け、このような場が薬学生と地域の人、双方に与える影響について観察した。

昨年度はデイベロッパーが「民」としてプロジェクトに参加し、協働した。今年度は地域の薬剤師会、住宅管理の事業者、共助の担い手としての地域住民も「民」として加わり、大学の「学」とM市の行政の「官」と連携しながら実践を通じた調査研究を行った。

2、調査研究方法

2-1 薬物乱用防止教育と健康教育を有機的に組み合わせたプログラムの展開と効果検証

M市の小学校において、薬剤師会の協力のもと、薬物乱用防止教育と健康教育を有機的に組み合わせたプログラムを実施する。「ダメ。ゼッタイ。」に加えて、医療用麻薬の周知啓発、薬物乱用に至るメンタルヘルス問題への理解、サプリメント活用による健康増進とリプロダクティブヘルス推進、健康意識向上に向けた仲間作りの重要性を盛り込む。保健室の養護教諭にインタビューし、現在実施しているカリキュラム内容について把握、独自のプログラムを作成する(昨年度、再開発地域の公園で実施した「あおぞらおくすり教室」等

の研究室で開発したワークショップ・プログラムを改変予定である)。小学校3校で実施、地域全体での取り組みモデルの構築を目指す。事前事後で児童を対象に、医薬品適正使用意識と相談(援助要請)力について意識調査を行う。結果は学校、薬剤師会及びM市のまちづくり部局・子ども部局にフィードバックする。

<事前事後アンケート内容>

(1) 薬物の種類は麻薬、大麻、覚醒剤の3種類だけ

・はい ・いいえ

(2) お酒やたばこは薬物?

・はい ・いいえ

(3) なやんだり、心配なことがあった時はだれかに相談しますか?

・はい ・いいえ

2-2 学校薬剤師の健康教育に関する意識調査

地域の薬剤師会に所属する学校薬剤師11名を対象とする。対象者は、地域と経験年数、学校種別についてあらかじめ精査し、偏りが無い候補リストを示し、その中から薬剤師会が適切な対象者を選び、推薦を受ける。全ての対象者から書面を用いたインフォームドコンセントを取得する。

調査は半構造化インタビューで行う。インタビュー1~2人、インタビュアー1~2人体制のグループインタビューを基本とする。インタビューの時間は1時間程度であり、録音を行い、逐語録を作成した。

解析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いた理論生成により実施した。さらにthe NVivo software (Version 11, QSR International)を使用し、テキストマイニングを行った。

2-3 お薬相談カフェの参加者における育児負担感と薬剤師のアウトリーチへの

ニーズに関わる意識調査

昨年度の研究成果では、育児負担感の中でも、薬や健康の相談先、いざという時に預け先がない、仲間づくりなどの孤育て予防につながる「関係性構築」に関わる状況を調べた(木戸・吉永、2018)。その成果に基づき、今年度は薬や健康に関わる「食」の問題に焦点をあてて質問項目を構築した。調査は、大学で開催したお薬相談カフェに参加した母親(19名:乳児期を思い出し答えてもらう:G1)と官民学で取り組むまちづくり活動で開催されたお薬教室(まちの学校祭 2019年11月3日開催)に参加した母親(13名:現在乳児のいる家庭:G2)を対象に実施した。主な質問項目は、ベビーフードの利用頻度・購入場所、手作り離乳食の調理時間、困ったこと、気になること、薬局への期待等である。

2-4 薬学生のセルフメディケーション とまちづくりに関わる活動参加の意義に関する調査

(赤ちゃん親子が大学の授業に参加するプロジェクト)

子育て相談カフェを大学で実施し、大学が連携する地域の薬剤師会の薬剤師に日頃の悩みを相談できる機会を設ける(2018年12月と2019年1月を予定)。

そこに参加してくれた親子に大学の授業(1年生の「行動と心理」の授業)への協力を依頼し、赤ちゃんとともに参加してもらおう。子育て相談カフェ活動および授業において、母親・赤ちゃんと大学生の交流や意見交換の場を設ける。

また、参加者の募集やカフェ開催については、自治体の子育て相談センターに協力依頼し、大学の授業にも参加してもらい、M市の子育て支援システムの解説を実施してもらおう。

大学生は母親がカフェで相談している間の赤ちゃんの見守り役および授業では育児中の母親・赤ちゃんと対話・接触する。その中で、母親の子ども・自分自身・家族の健康や育児の悩み、および子育ての楽しみ等の質問をして、子育てや赤ちゃんについての理解を深める。

授業の事前事後に大学生には、赤ちゃんに対する印象変化を花沢(1995)に基づいて作成した30項目のイメージ尺度項目(対児感情尺度)にて回答してもらおう。当日参加した母親12名には同じ項目を使用して、大学生に対する印象調査を行い、その結果を事前事後で比較する。

どちらの調査においても、質問紙の表紙には、調査目的の説明を記し、同意を確認、同意してもらったものに回答してもらおう方法で、インフォームドコンセントを得た。

2-5 統計解析

質問紙調査によるデータについてはSPSS25.0で解析を行った。インタビュー調査によるデータはテキストマイニングの手法によって解析した。

2-6 倫理的配慮

本研究は昭和薬科大学研究倫理委員会の承認を得て実施している(承認番号平成30年第30-11)。

3、調査研究成果

3-1 「ダメ。ゼッタイ。」から一歩踏み込むための薬物乱用防止教育プログラムの提案とその効果検証

図1にプログラムの内容を示し、また図2にはプログラムで使用したワークシートの内容を示した。

1) 援助要請に関する意識の変化

「悩んだり、心配なことがあった時にはだれかに相談しますか?」との問いへの事前事後

の回答の変化は統計学的に有意であり、今回のプログラムを通して「相談する」という援助要請力の向上が見られたことが示唆された(表1)。

2) 薬物乱用防止に関する理解

クイズや実験を通して理解を促した「薬物の種類」「酒・たばこも薬物」に関する問いについては、「薬物の種類」は事前から正答率が高く、「酒・たばこも薬物」については事後で正解が有意に多くなった(表2)。

3-2 学校薬剤師の健康教育に関する意識(インタビュー調査)

1) 対象者の基本特性

対象となる学校薬剤師11名の基礎特性を表3に示す。対象者の年代は、20代1名(9.0%)、30代2名(18.2%)、50代2名(18.2%)、60代6名(54.5%)であり、女性の割合が63.6%であった。薬剤師および学校薬剤師の経験年数の中央値[範囲]は、それぞれ26[5-43]年および6[1-35]年であった。

2) 理論生成分析による概念抽出

今回の分析では妊娠初期からサプリメントを摂取することで疾患予防が可能とされる二分脊椎症について、学校薬剤師の認識や健康教育として取り扱うことの可能性に焦点を当てた。

インタビューで収集したデータを起こした逐語録に含まれる文言は、理論生成分析によって図3のような要因間の関係性整理を行い、そこから5つの概念に分類した。一点目の概念は「生徒への指導の方法」である。定義は、生徒により内容を深く理解してもらえるにはどのような方法をとるべきかを検討することである。インタビューで得られた「妊娠可能期の女性の葉酸摂取の内容を単独で講義すると唐突である。」「説明したとして、生徒の心に残るかどうか分からない。」「講義の内容が葉酸摂取と妊婦のことだけでは生徒が興味を示してくれない可能性がある」というヴァリエーションから、体全般に関する内容、風疹など他の内容と関連づけて話すことにより、生徒に興味を示してもらえる可能性があることが示された。

二点目の概念は「生徒が教育を受ける意義」である。定義は、生徒が教育を受けることにどういった意義があるのかを検討することである。インタビューで得られた「本人だけでなく周囲の妊婦を守ることに繋がる」ことにより導き出された。一方で、妊娠前期の葉酸摂取に関して「食生活を改善するだけでは困難である」と「食生活を改善するだけで今のところは良いのではないか」という相反する意見を聴取した。この概念においては、薬剤師の認識の相違があることが示唆された。

三点目の概念は「学校薬剤師の指導の可能性」である。定義は、実際に学校薬剤師が生徒に指導を行えるのかを検討することである。インタビューで得られた「薬剤師自体栄養の観点にふれることが多くない印象がある。」「薬剤師が正しい知識を身につける必要がある。」「学校薬剤師のレベルの全体的な底上げをしていく必要がある。」といったヴァリエー

ションから導き出された。学校薬剤師を対象とした講習やワークショップを行うことや学校薬剤師同士で情報共有をすることが望まれていることが明らかとなった。

四点目の概念は「学校側の実施の可能性」である。定義は、学校側が授業・講演を実施できるのかどうかを検討することである。インタビューでは「指導を行えるだけの時間がとれない。」「学校側の教員(特に管理職等)の理解を得なければならない」といった課題も明らかになった。学校薬剤師の情報共有の場に管理職や養護教諭も参加して意見交換することや学校保健委員会で提案して校医や保護者にまずは理解してもらうこと等の対応策が示された。

最後の概念は「学校側の担当者」である。定義は、授業・講演を誰が担当すべきかを検討することである。「内容が近しいため保健体育の授業で行う可能性」「学校薬剤師が手伝いに回り、養護教諭や保健体育科教員、他の団体が講演を受け持つ場合もあるが、専門である薬剤師が講演の場に立つべきであるという考えもある」などのヴァリエーションから導き出された。養護教諭や保健体育科教員と相談を行うことや学校薬剤師から学校側に提案を行うことで実現可能性を高める余地が示された。以上五つの概念の背景には相互に関連している項目もあるため、関連性や影響を図示した(図3)。

3) 単語クラウド

次にテキストマイニングを行い、単語クラウドを作成した(図4)。頻出語上位として、薬₂₅25件、重み付けパーセンテージ4.2%)、妊娠(14件、重み付けパーセンテージ2.4%)、自分(一人称での使用は省く、14件、重み付けパーセンテージ2.4%)、子ども(11件、重み付けパーセンテージ1.9%)、サプリメント(9件、重み付けパーセンテージ1.5%)、保健(8件、重み付けパーセンテージ1.3%)、高校生(8件、重み付けパーセンテージ1.3%)、中学生(7件、重み付けパーセンテージ1.2%)が挙げられた。

3-3 お薬相談カフェの参加者における育児負担感と薬剤師のアウトリーチへのニーズに関わる意識調査

今回の分析では、「食」について特に離乳食に関わる「負担感」に焦点をあてて分析した。

1) ベビーフードの利用頻度

図5に示したように、毎日使用している家庭はそれほど多くなく、持ち運びや衛生面から外出時の利用率が高いことがわかった。

2) 就業の有無と離乳食への意識

無職の方がベビーフードを購入する際に、安全性を気にしていた($\chi^2=4.77$ Fisherの直接法 $p<0.05$)。また無職の方が離乳食を手作りする際に、栄養に気を付けており($\chi^2=3.89$ $p<0.05$)、調理時間が若干長かった(平均値 無職:29.4 ± 12.9分 有職:25.9 ± 13.0分)。調理時間には統計学的な有意差はなかった。

3) 第一子を育てる親の離乳食への意識

第一子を育てる親と第二子以降を育てる親では、前者の方が離乳食を作る際に栄養を気

にしていた ($\chi^2=6.27$ Fisher の直接法 $p<0.05$)。また、第一子を育てる親は、離乳食を作る際にインターネットを参考にする割合が高かった ($\chi^2=8.44$ Fisher の直接法 $p<0.05$)。

4) 離乳食で困ったときの相談相手

離乳食で困ったときの主な相談相手は友達 (68.8%)、次いで母親だった (46.9%)。医師は 3.1%、薬剤師は 0% であった。離乳食の購入場所は、薬局が一番多く (62.5%)、「薬局やドラッグストアで離乳食の相談ができれば良い」について肯定的な回答は 25 人 (78.1%) で、自由回答欄には、気軽に聞けるところがあると助かる、あったら嬉しい等の意見があった。こうした結果から薬剤師は離乳食や栄養についての悩みや相談にもっと役割を発揮する可能性があることがわかった。

3-4 薬学生のセルフメディケーション とまちづくりに関わる活動参加の意義に関する調査 (赤ちゃん親子が大学の授業に参加するプロジェクト)

1) 大学の授業に参加した際の母親の意識変化

1 月に実施した授業とその合間に実施したお薬相談や健康相談ができるカフェ活動を含め、参加してくれた母親は 12 名だった。授業への参加の前後で大学生に対するイメージを測定した結果を図 6 に示した。赤ちゃんの親が大学生に抱くイメージの事前事後の結果を示した。接近項目で得点が上がリ、回避項目で得点が下がった。

2) 赤ちゃんや母親、育児支援者との交流が大学生の対見感情に与える影響

授業に参加した学生については対見感情を事前事後で測定した (230 名)。欠損値があるデータを除去して、216 名分を分析した (男子学生 65 名、女子学生 108 名、性別未記入 43 名)。

大学生の印象の変化を表 4 に示した。肯定的項目に関しては全項目で得点が上がった。最初から得点が高かった「やわらかい」以外の 13 項目で事後の方が有意に得点が高くなり、イメージが良くなっていることが示された。否定的な項目ではすべて得点が下がった。事前で得点が高かった項目のうち、「たいへんな」「わがままな」「こわれやすい」は有意に得点が下がったが、「緊張する」は下がったものの、有意差はなかった。

4、考察

1) 薬剤師の地域での子ども・子育て支援の可能性

オーストラリアの薬局には pharmacy nurse と呼ばれる専門職が配置されて、妊娠中から子育て期間のきめ細やかな支援を担っている (Woodward et al., 2015)。薬局のあかちゃんグッズ売り場のそばに Pharmacy Nurse の机があり、買い物に訪れた親が気軽に相談できるスペースとなっている。本研究の調査により、離乳食の購入先では薬局・ドラッグストアの頻度が高いにも関わらず、相談する相手として薬剤師はなかなか選択肢に上がって

こない現状がある。本研究対象は地域の子育て相談センター利用者が多く含まれ、現在在宅で育児をしているものが中心であった。子どもと向き合う生活の中では、多様な心配が育児負担とつながっている状況がうかがえた。

子どもの離乳食で困ったことの一位は、H17年では食べ物の種類の偏りであった(28.5%)が、H27年では作るのが「負担、大変」(33.5%)が一位となった(厚生労働省 H17年度 & H27年度乳幼児栄養調査)。子どもの食事や栄養に関することは子ども・子育てに関する不安・悩みの上位(男性 16.3%、女性 32.7%)になっている(日本労働組合総連合会, 2013)。ベビーフードに関する意識調査では、簡便さではベビーフードの方が、愛情や経済性では手作りの方が優れているとする回答が高率を占めた(H17年度乳幼児栄養調査)。子どもの食事や栄養に関する不安は高く、手作り離乳食を負担に感じながらも、市販のベビーフードの利用に罪悪感がある現状がある。

孤育てとも言われるサポーターの少ない現代の育児家庭では、離乳食について学ぶ場所として最も頻度が高いのは保健所や市町村保健センター(67.5%)、次に育児雑誌やインターネットであった。一方で病院・診療所(産院)・助産所は14.1%であり活用されていない(H27年度乳幼児栄養調査)。国土が広く医療サービスが行き渡らないことを背景としたオーストラリアの Pharmacy Nurse であるが、薬剤師にもその機能の一端を発揮することは可能であるとする。そのようなニーズがあることをまずは周知して、虐待防止の切り札とされる「切れ目のない支援システム」に薬剤師も積極的に参加することは重要である。その際には、本プロジェクトで取り組んでいる地域の身近な支援拠点活動である「ひろば事業」の活用は有効である。

2) 学校薬剤師の健康教育における役割の重要性

本研究におけるインタビュー調査からは、妊娠前期の葉酸摂取に関する学校薬剤師による教育の実施を実現するためには、1. 葉酸と妊婦の内容のみならず、体全般・風疹など他の分野とひとくくりにして話す、2. 学校薬剤師同士の情報共有の場と薬剤師対象の講習・ワークショップの場を作り共通の認識をもち、さらにその場に学校教員も参加していただく、3. 養護教諭や保健体育科の教員と相談し、学校保健員会で提案するなどして学校側に相談をもちかけることが考えられた。

これらの点は、これまで学校薬剤師教育に関する先行研究においても検討・考察されている。一点目の「体全般・風疹など他の分野とひとくくりにした授業」に関しては、他の内容ではあるものの、静岡市内の小学校4校で救急医による講演において、「命の教育」を行うにあたり、45分授業を1ないし2コマで、1コマ目に医師という仕事に関するキャリア教育、2コマ目に自分の体を知ることを通じて命の教育を行ったことが報告されている(中田ほか、2016)。二点目の「学校薬剤師同士、さらに学校教員も参加した場での情報共有」に関しては、京都市養護教育研究会・京都市学校薬剤師会により、養護教諭を含めた教員と学校薬剤師が参加する「薬物乱用と健康」についての研修会が京都市にて開催されたことが報告されている。三点目の「養護教諭や保健体育科の教員と相談するなど学校側と

の協同」に関しては、中学校3年生女子を対象とした薬害教育が、養護教諭・学校薬剤師との連携による保健学習を各クラス3時間実施された例もある(中田ほか、2016)。また、指導・評価者としての保健体育科の教員、コーディネーターとしての養護教諭と、サポーターとしての薬剤師が協力して行う教育が「医薬品教育」では有効と考えられることも報告されている(加藤、2015)。

本研究で開発した「援助要請力の向上」を含む健康教育的要素を入れた薬物乱用防止教育プログラムは薬物乱用の予防に重要な援助要請力の向上および青少年が最初のきっかけとして遭遇しやすい「酒・たばこは薬物」という認識の獲得に効果があることが明らかになった。このプログラムの実施では、入念な養護教諭との打ち合わせやプログラムに学校薬剤師と心理師が連携して取り組むこと、および薬学生が協働することが特徴となっている。

第5次薬物乱用防止5カ年戦略では学校における薬物乱用防止教育の内容の充実強化と関係団体との連携強化が謳われている。心理師、薬剤師、養護教諭等が連携して乱用の背景、乱用の影響、対処行動(断り方)の学習を通して、「ダメ。ゼッタイ。」から踏み込んだ教育を行うことで、薬物乱用防止へのより大きな教育効果を得られる可能性が示された。

米国では youth friendly pharmacy という概念に基づいて、薬局が積極的に思春期以降の子どもたちの健康教育に関わっている実態がある(Calpurnyia&Bedell, 2018)。日本でも、今後は学校薬剤師が児童生徒と身近に接する健康に関わるスペシャリストとして、その役割をさらに広げていく必要がある。

3) 薬学生の地域参画と大学と地域の連携の大切さ

本プロジェクトでは赤ちゃんを介して、母親、子育て支援者、大学生が交流することで相互に良好な影響があることが示された。薬学生が赤ちゃんのイメージをよりよく持つことは将来薬剤師になった時にも、また万が一親になった時にも役立つことが推測できる。特に地域の支援者とともにプログラムを行うことは、子育て支援システムの理解にもつながり、重要なポイントである。

今回は我が子が大学生と接していることを見守った親側にも肯定的な変化が生じている点が着目される。渡邊ほか(2011)は地域のリーダーが大学生と交流することで「話しやすい」「きちんとしている」「あたたかい」等の評価が上がり、特に女性でその傾向が強かった結果と類似していた。自由記述欄には「また協力したい」などのコメントが多く、本プロジェクトは育児以外で交流機会の少ない母親にとって意義のある社会参加機会となったことが示唆された。専業主婦を対象にした調査的場(2015)は30代女性の就労・社会参加希望者が7割にも達することを示した。大学生との交流は次世代育成という視点に加え、育児ストレスのコーピングという側面からも重要な機会であることが示された。

5、まとめ

本研究を通して、薬科大学が地域（行政や民間）と連携することで、薬剤師の新しい機能への期待やニーズの把握とその機能の発揮への前向きな原動力となることが示された。学校薬剤師の健康教育への参画や地域の子ども・子育て支援の場へのアウトリーチ活動の重要性を認識できた。

薬学生はカリキュラムがタイトで、なかなか大学外の活動に参加する余地がない現状がある。しかし、地域の人々と交流することは社会課題に気づき、その解決に共に取り組むモチベーションの喚起には有意義な体験である。対人業務であり、超高齢化、少子化社会の中で難問に直面する医療の担い手として、今後も「まちづくり」をテーマとした学びの場を取り入れていく努力が必要なが明らかになった。

本研究の共同研究者：宮崎美子（昭和薬科大学・教授）、原梓（昭和薬科大学・准教授）、串田一樹（昭和薬科大学・特任教授）、豊川達記（豊川小児科内科医院・院長）、関根克敏（町田市薬剤師会会長）、そのほか調査研究に協力いただいた町田市子ども生活部子育て推進課、子育て相談センター、町田市薬剤師会、地域の皆様、小学校の児童・先生方に感謝申し上げます。）

6、調査研究発表（口頭又は誌上発表）

- 1) 吉永真理、原梓、宮崎美子、串田一樹、「ダメ。ゼッタイ。」から一歩踏み込むための薬物乱用防止教育プログラムの提案とその効果検証、日本薬学会第139回年会、千葉、2019/3/20-23
- 2) 伊藤朱里、吉永真理 薬剤師の子育て支援に関する研究：食・栄養・健康への悩みの実態把握に向けて、こども環境学会北九州大会、2019/5/18-19、北九州、発表予定
- 3) 吉永真理 大学の授業に赤ちゃん親子がやってきた：大学生との交流が子育て中の親に与える影響、こども環境学会北九州大会、2019/5/18-19、北九州、発表予定

7、引用文献

木戸裕美子・吉永真理 子ども・子育てとセルフメディケーション こども環境学会 2018年大会、埼玉、2018/5/18-20

吉永真理 セルフメディケーションとまちづくり：官民学連携プロジェクトの実践と効果検証公益財団法人、平成29年度一般用医薬品セルフメディケーション振興財団 調査研究事業報告

書、2018

吉永真理・飯塚祐介 薬学生、まちに出る：地域活動参加が大学生のコミュニティエンパワメント意識に与える影響 日本コミュニティ心理学会第21回大会、東京、2018/7/7-8

花沢成一 母性心理学 p242 医学書院 1992

Woodward BM et al., Beyond birth: Women's concerns about post-birth care in an Australian urban community, *Women and Birth* 29:153-159, 2016

中田託郎ほか 小学校での講演の経験～キャリア教育と命の教育静岡赤十字病院研究報. 2016;36:1-4

松本二千翔ほか 中学3年生への医薬品教育 養護教諭・学校薬剤師との連携による保健学習(会議録)、日本健康教育学会誌(1340-2560)24巻 Suppl. Page165(2016.05)

加藤 哲太 【医薬品に関する教育の展開】学校薬剤師との連携による医薬品に関する指導の展開(解説/特集)、学校保健研究(0386-9598)56巻6号 Page416-419(2015.02)

Cakpurnyia BR, Bedell J, A youth-friendly pharmacy initiative: Decreasing unintended pregnancies among disenfranchised youth, *Health Promotion Practice* 2018

渡邊裕子ほか 看護学生との交流による地域リーダー高齢者の若者イメージの変化 山梨県立大学看護学部紀要 15:27-35, 2011

的場康子 専業主婦の就労・社会参加意識：潜在的労働力を引き出すために *Life Design Report Autumn*: 42-46, 2015

表 1 援助要請行動に関する事前事後の変化【人数】

		事後				合計	p*
		いいえ	%	はい	%		
事前	いいえ	14	34.1%	27	65.9%	41	<0.0001
	はい	0	0.0%	275	100%	275	
合計		14		302		316	

*McNemar 検定

表 2 「薬物の種類」「酒・たばこも薬物」に関する問いの変化【人数】

		事後				合計	p*
		いいえ	%	はい	%		
●薬物の種類は大麻、麻薬、覚せい剤の3種類だけである							
事前	いいえ	295	99.0%	3	1.0%	298	n.s.
	はい	17	94.4%	1	5.6%	18	
合計		312		4		316	
●お酒やたばこは薬物？							
事前	いいえ	9	4.7%	181	95.3%	190	<0.0001
	はい	0	0%	125	100%	125	
合計		9		306		315 [†]	

*McNemar 検定 †1名無回答（事後）

表 3 インタビュー対象の学校薬剤師の背景

番号	性別	年代	薬剤師 経験年数	学校薬剤師 の年数	授業・講演
1	女性	60代	42年	6年	薬物乱用、禁煙、医薬品の適正使用、アンチドーピング
2	女性	20代	5年	2年	薬物乱用
3	男性	60代	20年	21年	医薬品の適正使用、(薬物乱用)
4	女性	50代	32年	3年	
5	男性	60代	43年	35年	医薬品の適正使用、薬物乱用 危険ドラッグ
6	女性	30代	6年	4年	薬物乱用
7	女性	50代	8年	12年	薬物乱用、(医薬品の適正使用)
8	女性	60代	30年	5年	薬物乱用
9	女性	60代	26年	7年	脱水症状
10	男性	60代	31年	6年	薬物乱用、SNS依存、飲酒・喫煙
11	男性	30代	10年	1年	薬物乱用、医薬品の適正使用

表4 大学生の対児感情尺度得点の変化 (平均点・対応のある t 検定)

	事前	事後	t 値	有意確率 (両側)
あたたかい	4.58	4.72	-3.084	0.002
きれいな	3.49	3.96	-7.600	0.000
うれしい	3.88	4.44	-10.462	0.000
おもしろい	3.49	4.28	-12.121	0.000
やわらかい	4.72	4.78	-1.308	0.192
ほほえましい	4.61	4.80	-5.707	0.000
しあわせな	4.44	4.62	-4.748	0.000
うつくしい	3.28	3.89	-10.088	0.000
たいせつな	4.66	4.73	-2.359	0.019
すばらしい	4.11	4.40	-6.031	0.000
たのしい	3.80	4.44	-10.442	0.000
あかるい	4.06	4.59	-9.142	0.000
かわいらしい	4.68	4.78	-3.695	0.000
すてきな	4.00	4.34	-5.678	0.000
さみしい	2.06	2.10	-0.615	0.539
おそろしい	1.99	1.97	0.167	0.867
たいへんな	4.46	3.93	7.466	0.000
こわい	2.28	2.13	1.740	0.083
わがままな	3.51	2.52	12.962	0.000
うっとうしい	2.37	1.66	10.674	0.000
きたない	2.20	1.79	6.724	0.000
かなしい	1.70	1.54	3.126	0.002
にくらしい	1.61	1.38	4.788	0.000
じゃまな	1.62	1.39	4.879	0.000
じれったい	1.98	1.62	5.674	0.000
きらいな	1.65	1.45	3.925	0.000
めんどくさい	2.33	1.77	7.795	0.000
うるさい	2.89	2.06	9.905	0.000
こわれやすい	3.74	3.18	6.972	0.000
緊張する	3.41	3.28	1.556	0.121

薬物乱用防止教育プログラムの内容

(45分授業、各クラス約30名、保健所支給リーフレット配布)

1. 事前アンケートに記入
2. 薬物とは何か/スライドの写真と保健所見本キットを用いて説明→クイズ
3. 薬物乱用とはどのようなことか?/薬の適正使用の実験→クイズ
→学校薬剤師によるその他の適正使用が必要な事例の紹介
4. 「薬物」が身体に与える影響/酒・タバコについてのクイズ→アルコールの実験
→「薬物」が脳に与える影響の整理→薬物依存症における身体依存と精神依存の説明
→薬物乱用で起きてくる困りごと→乱用薬物の実態
→薬物に誘われてしまう場面の説明→スライドで場面を説明し断り方をやってみるワーク
→自分で考えた断り方のセリフをワークシートに書く→グループで見せ合う
→いいなと思ったセリフを記入する(合計2つの断り方を学習)
5. なぜ薬物を乱用してしまうのだろうか?乱用の危険を未然に防ぐには.../
不安なとき、心配なことがあるとき、ひとりで抱えないで相談しよう
→薬学生のロールプレイ(困っている人に一声かける)
→つらい時、困った時相談できる人を3人思い浮かべてみよう
→ワークシートに記入(3人いればもし都合の悪い人がいても誰かに相談できる)
6. 事後アンケートに記入



図1 薬物乱用防止教育プログラムの内容

〇〇小学校 薬物乱用防止教育<ワークシート>

今日のポイント:

- ✓ 「薬物」とはなにか?
- ✓ 「薬物乱用」とはどのようなことか
- ✓ 「薬物」がからだに与える影響

薬物を乱用するとどんな困ったことが起きるか

★薬物をやろうと誘ってくる人がいたら、なんていってことわろう。せりふをかいてみて。

「
」

★友達と見せっこしてみよう(もっといいセリフがあったらメモしよう)「
」

★悩んでいる友達がいたら、どう声をかける?

薬剤師の卵のヒント:

★つらいとき、困ったとき、相談できる人を三人思い浮かべてみよう。

図2 薬物乱用防止教育プログラムで用いたワークシート

結果図 理論生成分析

→ 問題の解決策・目的 ← 関連 → 影響

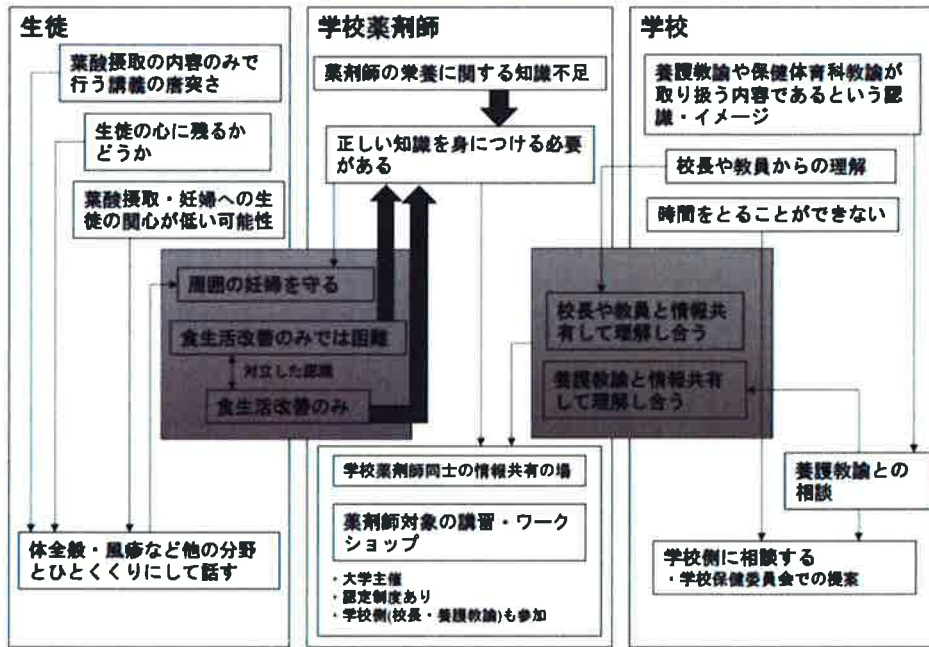


図3 理論生成分析の結果



図4 テキストマイニングによる単語クラウド

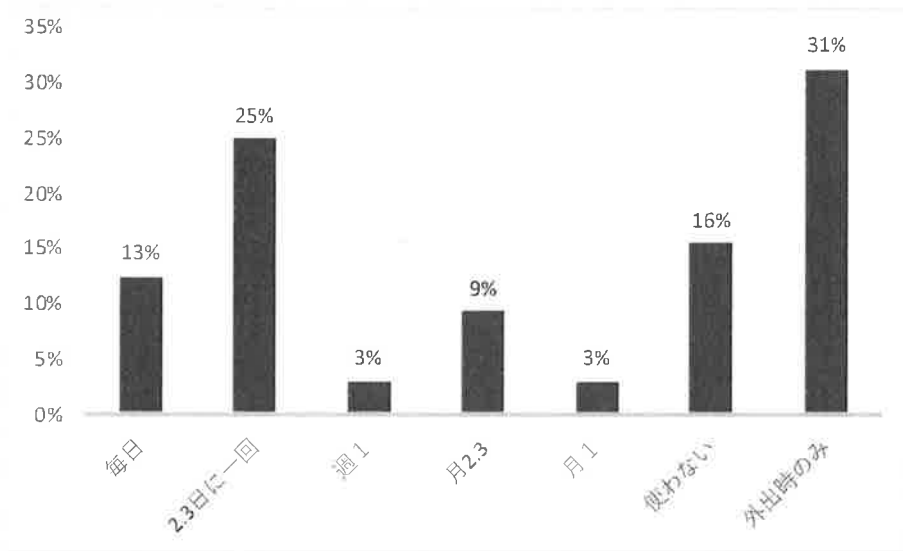


図5 離乳食の利用頻度

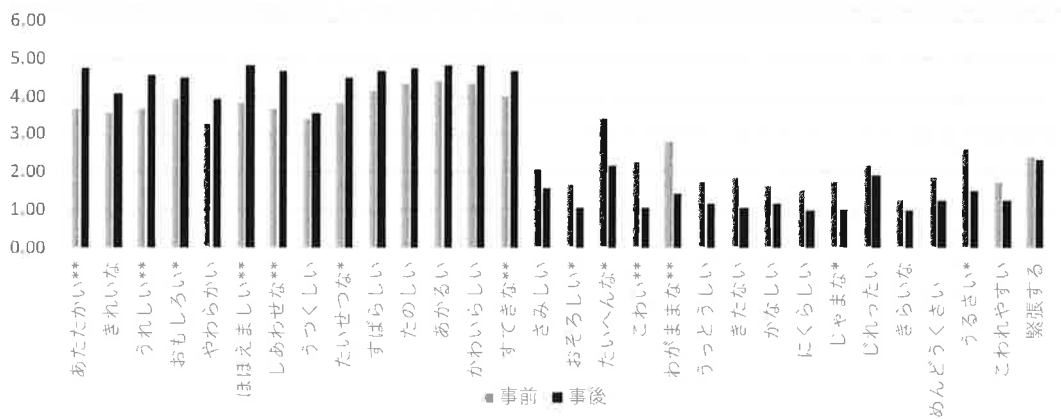


図6 赤ちゃん親子が大学授業に参加するプログラム事前事後の育児中の母親が持つ
大学生イメージの変化

Paired-t-test * p<0.05, ** p<0.01

Title: Self-medication and community development (Part II)

Name: Mari Yoshinaga, PhD.

Name of Affiliation: Laboratory of Clinical-Community Psychology, Showa Pharmaceutical University

Address: Higashitamagawagakuen 3-3165, Machida-shi, Tokyo, 194-8543

Tel: +81-42-721-1546

Abstract:

Under the theme of self-medication and community development, we worked on action research in collaboration with the public and private sectors, and continued to verify the effectiveness of the practice. The theme of this fiscal year was pharmacist outreach activities, and the sub-theme was focused on health education by school pharmacists, participation of pharmacists in childcare and health consultation activities in the community, and interaction with the community members and pharmacy students. We conducted Drug Abuse Prevention Education practice at three elementary schools and interview surveys toward 11 school pharmacists about health education activities. Before and after the practice of Drug Abuse Prevention Education program, the child's ability of help-seeking behavior was improved, and there was also an understanding of prevention of drug abuse. In the interview toward school pharmacists, the following five concepts were extracted: "Method of teaching to students," Significance of students to receive education, "Possibility of teaching school pharmacists", "Possibility of implementation by schools", and "person in charge of schools", showed the issues to be solved in the future. About outreach activities of pharmacist supporting child and child-rearing family in the community, there is anxiety and trouble concerning food and eating of babies among mothers raising at home, and it is pharmacy, drug store which is main purchaser of baby food product so that expectations and needs for pharmacists as supporter were shown to be high. The interaction between the students and the baby-parent pairs participated in the university class showed that through interactive experience, mutual understanding between the university students and the mother deepens.